

# 教育活動の「見える化」の試み

「伯太高校レーダーチャート」(HERC)の開発と実践

脇田孝豪

**要約** 2011年度、大阪府立伯太高等学校は、「伯太高校レーダーチャート」(Hakata Educational Radar Chart、略称：HERC、ハーク)を開発し、教育実践に活用し始めた。新しい教育ツールの開発により、教育の本質に迫りつつ、「全教育活動を通じての人権教育」を具体化せんとする伯太高校の教育思想を前校長が代弁する。

## はじめに

“God is in the details. (神は細部に宿る)”という格言がある。「真実は具体に有り」と読み替えて、これが学問世界のみならず、日常生活をはじめとする現実世界においても、物事の実実を考究していくうえでの基本的態度ではないか。

教育活動においても同断であって、教育活動の根本は、学習者を中心としたあくまで具体的な営みにあることをまず確認したい。つまり、学校や学級の学習者集団の平均や比較に、教育活動の本態があるのではなく、個々の学習者を中心とする日々の具体的な営みのなかにこそ、教育活動の根本と本質があるのだ。

## 1 学校教育の目的・目標に即した効果検証がなされているか？

2007年から文部科学省の「全国学力・学習状況調査」が小学校6年生と中学校3年生を対象に実施されてきた。それは、「学力・学習状況」の実態の一側面を全国レベルで調査して、教育課題を明らかにして、その課題解決を図ろうとするもので大いに意義がある。

同時に、その調査は、多様でデコボコのある教育活動の一側面を「平均点」や「得点分布」

という抽象的な数値でならして表すものにすぎず、特に、個々の学習者にとって、教育的に意義のあるものであるとは言い難い。

しかし、小学校・中学校だけではなく、高等学校においても、教育活動の成果を学力考査の成績だけで測ることが当たり前になってしまっている現状がある。

「全国学力・学習状況調査」は、当然のことながら、当該教科・科目の「目標」を明示した「学習指導要領」に準拠して、教育効果の測定がなされる。

同様に、学校教育活動の成果は、教育基本法に明示された「目標」に基づき、各学校が学習者及び学校の教育課題等に応じて設定している「学校教育目標」に準拠しての教育効果の測定がなされるべきはずである。

教育基本法は、次のように「教育の目的」と「教育の目標」を明示している。

(教育の目的)

第1条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

(教育の目標)

第2条 教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標

を達成するよう行われるものとする。

- 一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。
- 二 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。
- 三 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。
- 四 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。
- 五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

ここに、「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い」と書かれてはいても、他者や「平均点」と比較しての「学力」等には全く言及されておらず、「学習指導要領」も当然これに準拠している。

大阪府立伯太高等学校では、2011年度、次のように「学校教育目標」を設定している。

- A. 知力・体力・人間力！  
《自ら学ぶチカラ》の育成
- B. 進路実現（自己実現）をめざす！  
《自己コントロールのチカラ》の育成
- C. 人権感覚と豊かな人間性！  
《人間関係づくりのチカラ》の育成

伯太高校での学校教育目標に即した効果検証は、まずは、

- ①定期考査等での学業成績（平常点等の取組み

姿勢・態度評価を含む）

これを主な基礎資料として、これまで個々の生徒の指導をすすめてきた。

近年はあわせて、

- ②授業評価
  - ③学校教育自己診断
  - ④学校協議会等による学校関係者評価（学校教育自己診断等の評価を含む）
- も参考にしながら教育効果の検証をすすめてつ、教育活動の改善に努めている。

しかし、生徒一人ひとりの可能性を最大限に引き出して、教育目標A《自ら学ぶチカラ》を育成していくためには、進路実現（自己実現）をめざして頑張る、教育目標B《自己コントロールのチカラ》と、それらを底支えする自尊感情と自信をめざめさせるべく、人権感覚と豊かな人間性を培う、教育目標C《人間関係づくりのチカラ》の育成を併行してすすめる教育活動こそが最も効果的であると考えている。

また、その教育効果の検証においても、上記の教育目標A・B・Cに即して、まずは個々の生徒に即して具体的になされ、それらを生徒ごとに時系列で検証されていくべきで、これらを集積したものが最も基礎的かつ総合的な学校の取り組みの効果検証の第一の素材となるものと考えている。

## 2 HERC開発に到った背景

伯太高校には、他者との比較ではなく、まずは「オンリーワン」として生徒一人ひとりを大切に、（生活背景等も含めて）生徒理解に努めるとともに、個々の生徒に生き方・在り方を問いかけ励ましてきた人権教育の分厚い伝統がある。

例えば、人権教育教材として開発された「伯太パワーグラフ」は、生徒一人ひとりが自分の

来し方を振り返って、自分の現在の在り方を「見える化」して、自分の現在の課題を見つめ、課題解決のためのチカラを引き出そうとするものであった。

この「伯太パワーグラフ」を用いる方法がこれまで一定の教育効果をあげてきたことから、さらに「伯太高校レーダーチャート」を発想できた。

また、自ら人生設計して将来の「夢」を見だし、その進路(自己)実現に向けて準備させ、その営みを学校教育のなかで効果的かつ着実に支援していこうとしてきた「進路保障」重視の伝統は、キャリア教育の充実という形で結実している。

進路指導と総合的な学習の時間を活用しての人権学習「Global Studies (グローバル・スタディーズ、略称：GS)」のコラボレーション(協働)による、入学から卒業まで3年間のキャリア教育プログラム(実施計画)を整備・充実させてきた。

学校全体の教育活動との調整を図りながら実施計画(その裏付けとなる教職員の連携体制)を整備・充実させてきたなかで、車の両輪となるべきもう一つの大きな課題が浮かび上がってきた。それは、個々の生徒への日常の「キャリア教育」指導の徹底である。

個々の生徒への日常の指導は、これまで上記①の「定期考査等での学業成績(平常点等の取り組み姿勢・態度評価を含む)」をベースに教科担当と学級担任とに基本的にゆだねられてきた。そこでは、「学業成績」・「出欠状況」に基づく指導が中心となって、「こんな状況では進級・卒業が心配だ」といったネガティブな指導のみに陥りかねないリスク(逆に、成績等が良好な生徒には「進級・卒業さえできればよい」というメッセージを送ってしまいかねない)が常に付きまとってきた。

しかし、今、新しい教育ツールHERCの開発によって、「学業成績」・「出欠状況」に加え、「学習への取り組み姿勢」・「目標への準備状況」・「人間関係の在り方(自尊感情を含む)」等を含めて、教育活動全体を総合的に「見える化」することで、自分の頑張りとともに、自分の可能性を引き出していくうえで課題(ボトルネック)となっているところにまず生徒自身が気づきながら、教職員が個々の生徒をより効果的に指導していくことができるようになった。また、この「見える化」は生徒自身・教職員だけではなく、保護者にとっても自分の子どもの頑張りや課題が「見える化」できるものであって、家庭の教育力をより効果的に引き出すことができるものである。

さらに、HERCを用いての「見える化」によって、学校教育の大きな課題であり続けてきた学年進行に伴う学級担任業務の引き継ぎをより効果的にすすめることができるし、生徒一人ひとりを基点にすえた教職員間の連携体制のより一層の充実を図ることができる。

### 3 HERC開発に到った契機

伯太高校は総合学科と普通科の長所を活かして、1年生では基礎学力の一層の充実を図り、2・3年生では生徒の興味・関心と進路希望等に対応したエリア(科目グループ)を選択できる「普通科総合選択制」という大阪府独自の学校カリキュラム制度を採用している。この普通科総合選択制のもとで設定している5エリアの1つ「メディア・情報エリア」に対応して整備されているコンピュータールーム3教室半を最大限に活用して情報教育分野においても意欲的な取り組みをすすめてきた。

例えば、2010年度から1年生全員必修の情報Aの授業のなかで、「将来の仕事と進路」をテー

マに調べさせ、生徒一人ひとりがパワーポイントを用いて発表して、生徒どうしが相互評価も行うという取り組みを実施していることも、学校教育自己診断によればめざましい教育効果をあげていることがわかる。

人権教育の伝統とキャリア教育の蓄積に加えて、伯太高校の情報教育は、校内の情報機器や設備面だけではなく、情報教育担当者を中心とする教職員体制が充実しており、最新の情報機器を活用しつつ、新しい教育ツールを開発し、生徒とともに活用できる条件が整ってきていた。

つまり、新しい教育ツールHERCは、学校創立以来、生徒一人ひとりを大事に、教職員が一致協力して積極果敢に教育活動をすすめてきた伯太高校の総合的な学校力を背景に、開発および即時の教育実践に到ったものである。

## 4 HERC実践活用上のポイント

上述のHERC開発に到る経緯を踏まえ、実践活用するに当たってのポイント(当面の留意点)をまとめたい。

①個々の生徒(学習者)に即したものであること。すなわち、「絶対評価」が大前提であって、あくまで、他者と比較したりするためのものではない。

②教育目標に沿った総合的な効果検証ができること。すなわち、個々の生徒に即して、生徒本人の頑張りや教育課題の全体像(総合評価)が見えること。

③生徒自身が主体的に取り組めるものであること。すなわち、生徒自身が質問の回答を入力してチャートを出力するなどの工夫を通じて、生徒本人が自分だけのチャートという実感がもてること。

④教育活動のプロセスに継続的に組み込める

ものであること。すなわち、学期ごとに生徒が短時間で入力でき、入学以来の成長の軌跡がたどれること。

⑤保護者・教職員による生徒へのエンパワメントにつながるものであること。すなわち、上記の①～④(特に②)を通じて生徒の長所が発見しやすくなって、自尊感情のもとになるところが把握しやすくなること。

## 5 HERC実践活用の現況

次頁は、情報教育担当教員が最初に作成したHERC試行版(エクセル版)である。質問項目に生徒が回答入力すると、自動的に「リーダーチャート」が浮かび上がる。

2011年度1学期中間考査成績と出欠状況とともに、質問項目に回答する形で生徒の自己評価を入力させて、HERC試行版(エクセル版)を1年生の複数クラスで作成した。

念のため、生徒には質問項目に回答してチャートを出力させるだけではなく、プリントアウトした用紙の該当欄に、「自分自身の目標」「勉強への取り組み姿勢」「中間考査の成績」「豊かな人間関係づくり」「生活習慣の確立」についてのコメントも自分で手書きさせて、チャートとの整合性も一定確認できるようにした。

生徒は、質問項目に答えることでチャートができることに驚きの声をあげるとともに、記述式の箇所にも前向きに取り組む生徒が大多数であった。

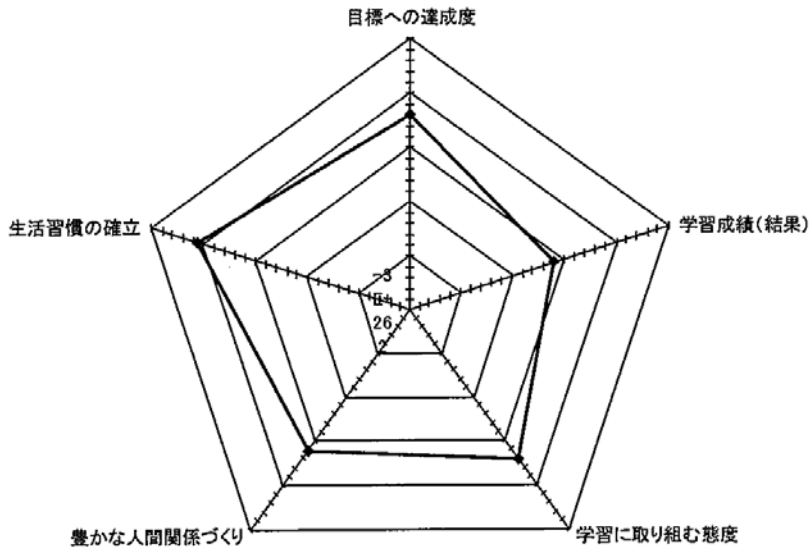
試行実施した当該の学級担任に意見を求めたところ、個々の生徒の現状と教育課題が相当な妥当性をもって1枚のチャートで「見える化」できていることの驚きが大きかった。また、予想外に極端に小さな5角形となり、心配な生徒が発見できた事例もあった。

2011年6月の保護者懇談週間で、HERC試行

# (HERC) 実施見本「3年3学期を終えて」

<b>目標への達成度</b>			<b>18</b>
あなたの高校生活は	113	学校では楽しいが勉強に身がはいらない	
行事への取り組み	123	準備はともかく、当日は頑張った。	
卒業に向けてのあなたの状態はどれが近いですか？	132	卒業できないかもしれないと不安だが、頑張っている	
自分の進路希望がかなうように努力していますか？	145	継続的に努力し、進学先・就職先も希望通り決まっています	
自分の将来について	155	目標に向けて相談しながら努力している。	
<b>学習成績（結果）</b>	<b>平均点：55.6点</b>		<b>13.9</b>
<b>学習に取り組む態度</b>			<b>17</b>
今回の成績についてどう思いますか？	314	もう少しできると思うので、次回がんばろうと思う	
あなたの授業態度は次のどれに近かったですか？	324	先生の話を聞き、自分なりに授業を受けた。	
今回の考査に向けてどれくらい勉強しましたか？	333	考査期間中1日に30分～1時間程度勉強した。	
勉強でわからないことはどうしましたか？	343	わからないところはあるが、質問しなかった。	
進路希望を授業以外の勉強をしましたか？	353	勉強はしたが、十分とは言えない。	
<b>豊かな人間関係づくり</b>			<b>16</b>
友だちとの関係について	413	わかってもらえるのは難しい	
先生との関係について	424	質問したり話しかけたりできる先生がいる。	
保護者はあなたの将来をどう思っているか	432	自分のことは自分で決めなさいと思っている。	
ほめられたときに受けとめることができますか？	443	時々できる。	
周囲の人はあなたのことをどう思っているか？	453	周囲の人たちは自分のことを気にかけていないと思	
<b>生活習慣の確立</b>		<b>出席率：95%</b>	<b>20.5</b>
朝食を食べていますか？	523	ほぼ毎日食べている	
夜十分に睡眠をとれていますか？	532	どちらかというと寝不足のことが多い	
あなたの休日の過ごし方で近いのはどれですか？	543	友達と遊びに出かけることが多い	
放課後はどうしていますか？	552	友だちとしばらく学校にいる。	
学校にがんばって行こうとしていますか？	564	少々しんどくても登校している。	

(HERC)レーダーチャート

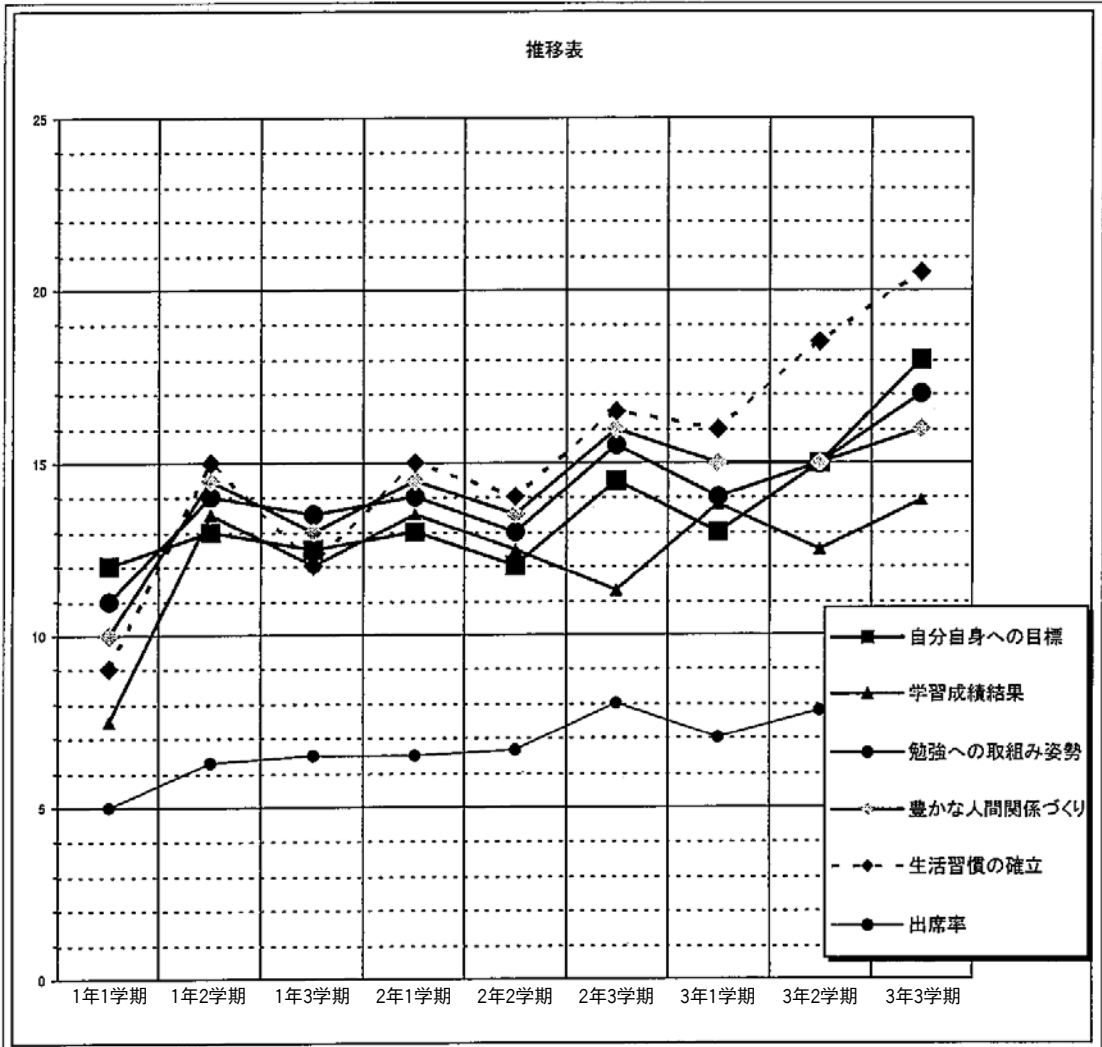


(感想記入欄)

目標への達成度
学習成績(結果)
学習に取り組む態度
豊かな人間関係づくり
生活習慣の確立

## \*\* 個人別指標時系列推移表 \*\*

(HERC) 実施見本「3年間を振り返って」



(感想記入欄)

目標への達成度
学習成績(結果)
学習に取り組む態度
豊かな人間関係づくり
生活習慣の確立

版（エクセル版）を実際に用いて懇談を実施したところ、上記の記述式の部分のコメントとあわせて好評で、保護者が学校の取り組みに信頼を寄せてくれるのが担任として実感できた。

今後の取り組みであるが、「HERCプロジェクト」会議をもってツール開発の組織体制を整えつつ、HERC試行版（エクセル版）に実践的な改良を加え、HERC普及版（アクセス版）作成に向けての準備をすすめている。

また、HERC普及版（アクセス版）作成に向けた検討をすすめるなかで、学級担任が個々の生徒の入学以来のレーダーチャートの推移をパソコン上でたどれるだけではなく、学習成績や出席状況等も、成績等のデータと連動させることで、現在の状況およびこれまでの推移をHERC普及版（アクセス版）から即座に呼び出すシステム構築も可能であることが判明してきた。

同時に、生徒の個人情報にかかるセキュリティを厳重に管理できるルールと組織体制について、一層の共通理解とともに再点検を行うことが必須であることも明らかとなってきた。

さらに、このHERC普及版（アクセス版）を用いて生徒面談等を行うことを通じて、成績や出席状況等の現時点のものだけを「紙ベース」で見ながらすすめる、いわば「瞬間的な」学習指導・進路指導・生活指導から、「時系列で追いつながら」これまでの生徒の頑張りや課題をより的確に評価しつつ、「未来志向的な」学習指導・進路指導・生活指導への転換を図ることができる展望も拓けてきた。

2012年の年明け早々、このHERC普及版（アクセス版）は完成し、年度末の3月29日、大阪府内のほぼすべての公立学校に案内して「HERC公開説明会」を実施し、参加校に著作権等の留意事項を説明をしたうえでHERC普及版（アクセス版）DVDを配付した。

## 6 HERCに期待できる教育効果

ここで、HERCを用いた教育実践により期待できる教育効果を改めて列挙しておきたい。

個々の生徒の教育課題と教育効果を一元的に「見える化」することにより、

①自分の頑張りや課題への生徒自身の気づきを促すことができるので、生徒本人の自覚を土台にして、その可能性と底力をより効果的に引き出せる。

②自分の頑張りや課題への生徒自身の気づきと自覚、そして、課題解決に向けての生徒自身の意欲を教職員が確かめ共有することで、よりの確かな生徒指導と文字通りの支援ができる。

③同様に、自分の頑張りや課題への子ども生徒自身の気づきと自覚、そして、課題解決に向けての子ども自身の意欲を保護者も確かめ共有することで、家庭の教育力をより一層引き出せる。

④入学以来のチャートの変遷を通じて、生徒自身・教職員・保護者が個々の生徒への教育効果の在り様を具体的に振り返ることができる。このことが3年間の教育効果の検証となるとともに、生徒自身の達成感とエンパワメントにつながる（教職員・保護者にとっても同様である）。

## 7 HERC活用上の留意事項

このHERCを活用するにあたっては、生徒の個人情報にかかるセキュリティを厳重に管理できる「ルールと組織体制」が必須であることを繰り返し確認しておきたい。

また、この教育ツールは、伯太高校がこれまで培ってきた人権教育・キャリア教育・情報教育の蓄積と、教職員のチームワークの良さを最大限に活用して取り組みをすすめることができ

ているものである。

さらに、この新しい教育ツールは、あくまで個々の生徒へのエンパワメントをめざすものであって、レーダーチャートの形や大きさ等を他者と比較して競わせるものではないことを再度確認しておきたい。

## おわりに—HERC発案への課題意識

①小・中学校に限らず、高校現場においても、長年の経験と勘を頼りに教育実践をすすめる優れた先駆的な教員が多かった。学校時代を振り返って、結果としての学業成績というよりも、学習態度や自分の将来への無責任な態度、そして生活規律の方を叱責された記憶のある人が多いのではないか。

しかしながら、教員の大量退職・大量採用時代を迎え、いわゆる「ワイングラス型」の教員の年齢構成から、貴重なベテランの経験と勘が引き継がれないままになる学校もありうるという危機感に駆られてならない。ベテラン教員がまだ健在な時期に、新しい「教育ツール」を一緒に開発・改良して、これまでの経験と勘を継承していくことを切に願うところである。

②「全国学力・学習状況調査」の大阪府における分析を垣間見ると、学校教育の学力規定要因について、小学校6年生では、『学校の取組』は、直接的に児童の『学力』に影響を与えるとともに、児童一人ひとりに自信を持たせ、『自己効力感』を育てることを通して、間接的に学力に影響を与えている」とある。

また、中学校3年生では、「学力形成の要因として『学習態度』」、「次に、『自己受容感』という要因が新たに加わっている」とし、「中学生という発達段階においては、『自信喪失』や『自分がどう思われているか』人の目を気にする等の感情が学力にも大きな影響を与える要素に

なってきた」。]

さらに、「学校教育の学力規定要因については、『学校の取組み』は、生徒の『学力』に直接的に働きかけるよりはむしろ、『学習態度』や『家庭学習の習慣付け』をとおして間接的に『学力』に影響を与えていることがわかる」とある。

上記の「学習態度」を「学習への取り組み姿勢」、「自己効力感」や「自己受容感」を「豊かな人間関係づくり」、「家庭学習への習慣付け」を「進路（自己）実現への達成度」と置き換えるならば、これはまさしく、伯太高校におけるHERCを開発・実践しようとしてきた趣旨そのものである。

しかし、教育基本法の「教育の目標」(第二条)に「一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い」とあることを踏まえ、学校教育活動がしっかりと目標とすべきは、表面的な「学力」だけではなく（それはそれで重要な目標だが）、生涯にわたってその学力の土台をなす「学習態度」（学習への取り組み姿勢）の方ではないのか。

③大阪府の教育行政も学校現場も、「学力」の一側面だけを肥大化させて教育活動の「成果」を測る、いわゆる「偏差値教育」への批判と自戒を堅持してきたところである。しかしながら、インターネット上で検索すれば即座にわかるように、世間では、いわゆる「偏差値」による学校評価がまかり通っている現状がある。

もちろん、公私立を問わず、教育活動の公共性を考えるならば、当然、学校評価そのものは基本的に公開されるべきものである。だが、学校教育目標を踏まえた多様な教育活動のなかで、数値把握しやすい「学力」の一側面だけが「偏差値」として強調されてきた重大な要因は、学校現場が教育活動の成果を一定の客観性をもって効果的に発信しうる方法を他にもってい



なかったことにもよるのではないか。

このHERCの取り組みは、学校教育活動の成果を一面的ではなく、多様な教育観を前提に発信できる可能性を拓くものである。というのは、HERCの取り組みの前提にあるのは、まずは、生徒一人ひとりを大切にしたい総合的評価の理念であって、いわゆる「偏差値」という一面的な評価だけではないからだ。

④1999年の「大阪府教育改革プログラム」に明記され、現在の「『大阪の教育力』向上プラン」にも継承されている、大阪府の教育改革の大きな柱は、学校・家庭・地域社会の総合的な教育力の向上による学校教育の再生である。

個々の生徒の多様な教育目標に即した教育効果の測定ができるHERCのような新しい教育ツールが、どの学校現場でもそれぞれの学校教育目標に即して実施できるようになれば、生徒(子ども)を基点に据えての学校と家庭(保護者)との信頼関係がより効果的に形成され、それを

ベースに地域社会の人的ネットワークもより一層充実していくのではないか。

⑤戦後60数年経ち、戦後教育の第二世代・第三世代の親が保護者として、学校現場に登場してきている。保護者自身も(実は教職員もそうである)事実上の「偏差値」教育のなかで育ち、一面的な教育観で子どもを見てしまうことが当たり前になってしまっている状況があるのではないか。

教育に関する国際的な調査のなかで、日本の子どもに際立っている「自信」や「自尊感情」、そして将来的な展望や意欲のなさは、戦後教育が「偏差値」教育のなかで意図せずして育成してしまったネガティブな側面と言えはしないか。

伯太高校のHERCの取り組みは、日本の学校教育全体にのしかかっている上記の重大な課題の解決に向けて、学校現場からの一石を投ずるものである。